

『黄金探索者』から『隔離』へ

——姉と恋人のあいだで

川 邊 早 紀

[キーワード：①ル・クレジオ ②『黄金探索者』 ③『隔離』 ④モーリシャス小説 ⑤自伝的小説]

1. はじめに¹⁾

20-21 世紀のフランスを代表する作家ジャン＝マリー・ギュスターヴ・ル・クレジオ (Jean-Marie Gustave Le Clézio, 1940- 現在) は、1963 年に『調書』を発表して以降、1 年に 1 作品の頻度で作品を発表し、現在も執筆活動が続けている。その作品群の中でも、18 世紀末に祖先がモーリシャス島に移住後、繁栄し衰退したという事実に基づき²⁾、モーリシャス島を舞台にした自伝的小説 (以下、モーリシャス小説) を 5 作品発表している³⁾。

ル・クレジオは 1990 年に 50 歳を迎えると、50 歳という年齢は自分自身を見つめ直す特別な年齢である⁴⁾ と語る。このことから『黄金探索者』が発表された 1985 年から『隔離』が発表された 1995 年にかけてのこの時期は、作者にとって人生の節目となる時期でもあったと考えられる。さらに鈴木雅生が言及しているように⁵⁾、ル・クレジオは 1980 年代から

90年代にかけて、社会問題に興味を持ち、政治的な発言をするようになる。このようなことから、ル・クレジオの祖先にまつわるモーリシャス小説の発表は、作者自身の変化と共に始まったと考えられる。そのため本論文ではそのモーリシャス小説のうち、1980年代から90年代にかけて発表された『黄金探索者』(*Le Chercheur d'or*, 1985)と『隔離』(*La Quarantaine*, 1995)を論考の対象とし、その変化を比較検討していく。

『黄金探索者』と『隔離』には設定と構造において共通点がある。まず物語設定においては、中地義和も指摘している⁶⁾ように、物語の語られる年代や場所、あるいは登場人物の年齢や主人公との関係性などに共通点が見られる。これはなぜならル・クレジオが両作品にて、祖父や祖先が過ごした家など、多くの場合、同一のモチーフ⁷⁾を題材として執筆しているからであり、そのため物語設定において共通する部分が多く見られるのである。

さらに物語の構造においても、2作品が2つの時間軸の物語で成り立っているという共通点がある。『黄金探索者』は当初『黄金探索者の日記』という題名で、『ロドリゲス島への旅』(*Voyage à Rodrigues*, 1986)と合わせた一巻本として執筆したと作者自身が語っている⁸⁾。これを踏まえると『黄金探索者』と『ロドリゲス島への旅』は単一の作品であると捉えることができる。そして『黄金探索者』は19世紀末から20世紀初頭の物語でアレクシが主人公であるのに対して、『ロドリゲス島への旅』はアレクシの子孫で、ル・クレジオと見なすことができる現代の語り手が主人公であり、よって2つの時間の物語で構成されていることがわかるだろう。また『隔離』も19世紀末から20世紀初頭を生きるレオンの物語(「毒を盛る男」(« L'empoisonneur »)と「隔離」(« La quarantaine »))と、現代を生きるレオンの物語(「終わりなき旅人」(« Le voyage sans fin »)と「アンナ」(« Anna »))で構成されている。よって2作品の構造は類似的である

と言える。

以上のように両作品には共通する要素が幾つも見られることがわかるが、一方でその内容には、明確な差異が見られる。例えば『黄金探索者』のアレクシは、父の遺した宝の地図を頼りに、見知らぬ海賊の隠した財宝を探そうとロドリゲス島へと行く。一方『隔離』のレオンは、モーリシャス島の親戚の住まう家を目指して、兄夫婦と船に乗るものの、船内で天然痘が発生したために、プラト島へと隔離される。このように2作品の主人公には、旅の目指す先や、夢見ているものに明確な差異があるのだ。そのため本論文ではアレクシとレオンの物語に着目し、物語内容にどのような変化が見られるのか分析する。そしてこの変化にどのような意味があるのかを明らかにすることを目指す。

具体的な論文の構成は、次のとおりである。次章では、アレクシとレオンの夢と現実について論じる。第3章ではアレクシとレオンの物語に登場する女性たちを主人公との関係性によって分類したうえで、彼女たちがどのような役割を持つのか、主人公にどのような影響を与えるのかについて論じる。第4章では、第3章の分析を踏まえて、主人公が、最終的にどのような選択肢を選び、どのような結末に至ったのか検討する。第5章では、それまでの論考をもとに、両作品の差異について明らかにする。

2. 夢と現実

本章では『黄金探索者』の主人公アレクシと『隔離』の主人公レオンに焦点を当て、特に2人の主人公の夢と現実との対比について検討する。

I アレクシの夢と現実

『黄金探索者』では、アレクシが幼少期を過ごしたブーカンの谷が楽園のように描かれている。ブーカンの谷での生活は「それほどの自由を享受

しているということを、ぼくたち分かっているのだろうか？ぼくたちはその言葉の意味さえ知らないのだ」(CO, 33-34)と語られることから分かるように、自由で制約のない生活を送っていた。唯一の友人はドゥニという黒人の少年で、彼はアレクシらが住んでいた場所とは遠く離れた「向こう側にあるドゥニと黒人たちの土地」(CO, 37)に住んでいる。要するにアレクシたちとは別の世界に属する人間である。ドゥニはアレクシに自然の中での生活に関するたくさんの知識を教え、アレクシを初めての船旅へと連れていく。こうして2人は幸福な時間を共に過ごす。

しかしながらアレクシら一家は、ブーカンの谷からの立ち退きを余儀なくされる。これはアレクシの父の事業の失敗が原因である。当時の父親は事業がうまく行かず、破産しかけていたが、リュドヴィク伯父と不仲であったことから、資金援助や事業援助を受けることができなかった。そして最後の頼みの綱であった発電所設立の計画も、サイクロンの到来で無念に終わる。こうして父親は自力で再生する希望を完全に失い、ブーカンの土地もリュドヴィク伯父によって抵当に入れられてしまう。そしてアレクシらは、親戚のいるフォレスト・サイドへと引っ越さなければならなくなるのだ。

ブーカンの谷という楽園の喪失は、レオンにとっての夢追いの始まりをも意味する。アレクシはブーカンから引っ越す際「ブーカンの谷を離れるこの旅こそが、僕たちの最初の旅なのだ」(CO, 89)と語る。そしてフォレスト・サイドへと移動すると「プライベートィアと父が呼んでいた、見知らぬ海賊と共に生き始めた」(CO, 93)。このようにレオンはブーカンの谷を離れることにより、夢の旅を始めるのである。

けれどもぼくとロールにとって最良の時とは、まるで年老いた冒険家が少年時代に過ごした土地に戻ってくるかのように、いつか自分たち

の家に、モーリシャス島に帰る日のことを（もちろんはるか先のことだが）話す時であった（CO, 100）。

以上の引用からも分かるように、アレクシはブーカンの谷に帰ると言う夢想をする。アレクシはその後、父親の死を契機に、財宝探索をするためにロドリゲス島へと旅立つが、その際にも「ぼくの旅の果てには、タマランの黒い海岸に砕ける海があり、川の河口の磯波がある。ぼくが出発したのは、あそこに戻るためだ」（CO, 135）と言う。この引用の海や川はブーカンの谷の描写を指している。すなわちアレクシはロドリゲス島へと旅をすることによって、ブーカンの谷へ戻るという夢、要するに少年時代へ戻るという実現不可能な夢を追求するのである。

しかし夢追い人であるアレクシにとって、衝撃的な現実が訪れる。それは母親の死である。

「母の死」を信じることができない。すべてが終わったのだ。ベランダの薄明かりの中で話していた彼女の声は、もう聞くことができないのだ。彼女の香水も、彼女の眼差しもないのだ。父が死んだときに、受け入れられない忘却の方へと、私の力の源であったものや私の子ども時代から永遠に遠ざかる方へと、後退するように落ち始めたように思える。財宝は到達不能で、あり得ないものである（CO, 319）。

すなわちアレクシにとって母親の死は、ブーカンの谷の生活に完全戻ることができないという通達のようなものである。なぜなら一家がフォレスト・サイドに移動してからは、アレクシが家族と過ごす時はほとんどなかったために、母親との思い出の大部分がブーカンの谷で構成されていたからである。そのため夢を見続けることが困難であるという現実と直面する

のだ。

それでもアレクシは母親やロールのことを思い出し、かつての日々を夢想することをやめない。このような夢想の中では、例えば「できればママと永遠に続くものについて小さな声で話したいのに」(CO, 333) や『『百合の花ナダ』についてロールと話したいのに」(CO, 333) などと、非現実的な仮定を表す条件法現在形を用いて「したいのに」(je voudrais) と述べられる。前述したように、アレクシはもう家族との過去の生活を送ることはできないことを知っている。そしてもちろん、これまで夢想し続けてきたブーカンの谷での生活など、全ての夢想が現実的に不可能であると気づいている。しかしそれでも尚、夢想することをやめられないのである。

II レオンの夢と現実

『隔離』のレオンにとっても楽園と言えるべき場所が存在する。それはモーリシャス島のアンナ⁹⁾の屋敷である。レオンの一家は、まだレオンが母親の体内の中にいた時、モーリシャス島を追い出され、パリのモンパルナスという地区へ移動したという過去がある。そのためレオンはモーリシャス島やアンナの屋敷について全く知らなかった。しかしモーリシャス島を離れた時、当時9歳であった兄のジャックから、かつてのアンナの光景やその楽園のような日々について何度も聞かされ、いつしかレオンはその場所が自分にとっての楽園であるかのように、夢想するようになる。そのためモーリシャス島へと向かう途中、アデンの停泊地に寄港した際には「彼が探しにきたもの全てがここから始まっているのだ。それは新しい体験であり、リュエイユ・マルメゾンの寄宿舎¹⁰⁾との絶縁であり、子ども時代の忘却であった」(Q, 37) と語られ、そしてレオンはアデンの未知なる景色を眺めただけで「もう到着したも同然である」(Q, 37) と思う。このように、如何にレオンが未知なる土地であるモーリシャス島へと期待を

膨らませていたかが分かるだろう。

一方でレオンは徐々にアンナという土地への失望し、期待をしなくなっていく。これはレオンたちの乗せた船の中で感染症が蔓延し、プラト島で隔離されたことが契機となる。隔離が始まって19日後に、レオンは以下のようなことに気づく。

ジャックはアレクサンドルの名前を口に出そうとはしないが、長老アレクサンドルは僕たちの居場所について知っているはずである。彼らに僕らの状況が伝わっていないなどあり得ない。何もしないのは、その裏で何か意図があるからだ。ぼくたちは幽霊なのだ。20年近く前に、アントワヌとアマリア¹¹⁾がモーリシャス島を離れた時、ぼくたちは存在することをやめた。今となっては、1856年の春にハイダリー号のクーリーたちのように、僕たちを抹消するだけなのだ（Q, 111）。

レオンはアンナについて素晴らしい日々のことしか聞かされてこなかった。しかし隔離生活を経ていくうちに、アンナに住んでいる自分の親戚たちに不信感を募らせるようになる。そして自分たちの存在自体が認められていないという現実気づく。こうしてレオンはアンナという場所への夢を見ることはなくなるのだ。

またレオンはプラト島でシュルヤヴァティという少女と出会う。彼女がレオンをバーイー（Bhai）と親しみを込めて呼ぶことからわかるように、レオンとシュルヤヴァティは次第に心を許し合い、恋人や家族のような関係性になってゆく。このように2人の関係性が親密になるにつれて、レオンはシュルヤヴァティと一緒に生きるという、新たな夢を見るようになる。

3. 主人公と女性

この章では、前章で分析したアレクシやレオンの夢と現実を踏まえ、彼らと関係の深い女性登場人物である、姉と恋人に着目する。そして女性登場人物たちが、主人公たちに対して、どのような役割を担い、主人公の夢と現実とどのような影響を与えているのかについて論じる。

I 主人公との関係性：姉

主人公との関係性が姉である人物は、『黄金探索者』ではアレクシの姉ロールが、『隔離』では兄ジャックの妻である、義姉シュザンヌが該当する。『黄金探索者』のロールとアレクシは、子どもの頃、恋人に見間違われるほど密接な関係であった。しかしアレクシのブーカンの谷への夢が原因で、最終的に2人はやむを得ず、別々の人生を選ぶことになる。そして『隔離』のシュザンヌはレユニオン出身で、14歳という若さでジャックの許嫁となる。彼女はジャックの故郷でインド人移民のために無料診断所を設置したいという理想を持ち、レオンとジャックと共にモーリシャス島へ向かうのである。

ロールとシュザンヌは現実を直視する役割を持つ人物である。これはロールとシュザンヌの眠りの描写より明らかである。第一に『黄金探索者』の眠りの記述について時系列順に記すと、まずアレクシが夜中にこっそりとベッドを抜け出し、海の音を聴きに行く時、「僕はロールが眠っていないのを知っている」(CO, 13)と語られる。そして彼が帰ってきた時にも「ロールは眠っていなかった」(CO, 14)ことからロールはアレクシが帰って来るのを待ち続けていたことが明らかになる。また家庭の経済状況の悪化し、大人たちが夜中に会議をしていた際に、ロールはその状況を察しており「僕はロールが眠っていないのを知っている。彼女は暗闇の中で目を

大きく見開いていた」(CO, 36) と語られる。そして母親が熱病にかかり、ロールとアレキシが不安を感じていた日々においても、「夜、彼女は眠らない(…) 僕は彼女の目が暗闇の中で開かれているのが分かる」(CO, 65) と描かれる。このように眠りに関する描写は、家族の生死や社会・経済状況に関わる重要な場面で見られる。そしてどの場面でも現実を見通すかのように、彼女は目を大きく見開き、眠らないのだ。

さらにアレキシの夢の中でもロールは眼を見開いている。例えばアレキシは金銭面や母の病気など、生活が苦しくなると、船に乗りどこかへ行くような夢をし始める。その際、「同じく」という意味を持つ単語 *aussi* を使用して「ロールも目が開いているのがわかる」(CO, 69) と語り、2人とも起きていることを示す。そしてアレキシは夢の中にて「*ぼくたち*が北に向かう船に乗り、見知らぬ海賊の島へと向かうのを思い浮かべる。すると**ぼく**はマナナヴァの方のノワール川の峡谷の奥へと運ばれていく」(CO, 69: 傍点引用者) と語られる。この場面では、最初の主語に一人称複数形の「*ぼくたち*」(*nous*) が用いられ、アレキシがロールと2人で夢の世界を旅しようと試みている様子が描かれる。しかし実際に旅するのは一人称単数形の「*ぼく*」(*je*)、すなわちアレキシだけであることがわかる。さらにアレキシはロールの居場所から遠く離れたロドリゲス島の船上、すなわちロールの居る現実から遠く離れた世界でも、「彼女は起きている」(CO, 127) と断言する。そしてロールの眼差しを「荒々しさと怒りの炎」(CO, 127) と表現し、その眼差しを思い出しながら「旅立ちの激しい心痛を感じる」(CO, 128)。このようにアレキシの夢の中にもロールは登場するが、必ずアレキシとは別の道を歩むのである。

一方でロールは母親の死を告げられると「すぐに眠り込んだ」(CO, 319)。ロールには将来的に自立した生活を送りたいという願望があり、学校へと通うが、母親の手伝いをするために退学し、自立の夢を諦めざるを

得なかったという背景がある。このように母親に対して常に献身的な態度であったロールは、母親が死ぬ瞬間まで、家族という現実と向き合い続けた。そして母親が亡くなると、もう家族という現実を直視する必要がなくなったため、眠ることができたのだ。

第二に『隔離』のシュザンヌの眠りについて考えよう。レオンやジャックがモーリシャス島へ理想を持ち続けているように、シュザンヌもまた一貫して理想を持ち続ける。シュザンヌには眠りの描写も何度か見られるが、一方で彼女もまた現実気づくと眠ることができない。例えばシュザンヌらが隔離されている島の反対側で、重い病気に苦しむ人々が沢山おり、誰からも助けられることのないという事実を知ったその晩「彼女は眠れなかった」(Q, 85)と語られる。これは彼女の夢が苦しむ人々を救うことであったにも関わらず、彼らを救えないという現実直面したからである。さらに夜間禁止令が下された後に、レオンがこっそりと外出した際にも「彼女は眠っていなかった」(Q, 125)と明確に記されている。この場面の彼女の眼差しは、レオンに対してその外出な危険なものであると伝える、姉からの現実を見据えた警告のようなものである。以上のようにシュザンヌの眼も、現実気づいた時には、その現実を直視するかのように見開かれるのである。

II 主人公との関係性：恋人

主人公の恋人とは『黄金探索者』のウーマと、『隔離』のシュルヤヴェティのことである。ウーマはインド出身の母をもつロドリゲス島の山の民¹²⁾であり、訛りのないフランス語を話す。父親を幼い頃に亡くし、一時期修道院に入れられるが、物語の現在では母親と弟と暮らしている。アレクシが衰弱していたところを助けたことにより、彼と親しくなり恋人関係になるものの、最終的にイギリス兵に捕えられた弟を見捨てられず、ア

レクシと別れて弟の元へと戻る。

シュルヤヴァティはウーマと同じように訛りのないフランス語を話し、イギリス系インド人の母親をもつ少女である。彼女もまた幼い頃に父親を亡くし一時期修道院に入れられるが、1年前にプラト島へと移住し、隔離所から山を挟んで反対側の場所で、母親と2人で暮らしている。レオンとシュルヤヴァティは、一方はモーリシャスのお偉方の一族で、もう一方はプラト島の住人であり、身分が全く異なる2人であったが、共に過ごすうちに自然と恋人となる。その後母親を茶毘に付され、プラト島に留まる意義を失くした彼女は、新しい家族であるレオンと共に旅に出る。

さてウーマとシュルヤヴァティに関して、前者はロドリゲス島の自然の世界に、後者はプラト島の自然の世界に属していることから、主人公を人間の世界から自然の世界への導き手としての役割¹³⁾を果たしていると考えられる。この章ではその役割について2つの要素から詳しく論じる。

II-1 土地と身体

ウーマの生活しているロドリゲス島の空間と、シュルヤヴァティが生活しているプラト島の空間は、人間の管理下には置かれたい、自然の環境である。そしてウーマとシュルヤヴァティは人の目を気にせず、全裸になって漁をしたり、人の手が入らないような自然の中で生活をしたりしていることなどから、彼女たちはその土地に馴染み、適応していることがわかるだろう。またアレクシとレオンによるウーマやシュルヤヴァティの身体への視線からも、彼女たちが如何に自然に近い存在であるかということが明らかにである。

例えばアレクシはウーマの身体について「黒い金属の身体」(CO, 235)や「溶岩色の身体」(CO, 284)と語り、鉱物や金属のような物質的なものを用いて表現する。これはロドリゲス島が岩石や鉱物で溢れている土地で

あることから、その土地の鉱物と比較して例えられていると推測できる。さらに「[ロドリゲス島]にあるすべてが彼女のものなにかもしれない」(CO, 202)と述べていることから、アレクシはウーマがロドリゲス島そのものであると考えていたことが明らかである。

レオンもアレクシと同様に、プラト島の「全てがシュルヤの世界だ」(Q, 142)と考えている。そして「細身で柔らかで、姿を消しては現れるようなシュルヤの身体を石の中に感じる」(Q, 142)と語り、そのまま海の中で射精する。このようにレオンもまた、シュルヤヴァティの肉体をプラト島の大地に見出しているのだ。以上のことから、ウーマやシュルヤヴァティは、単にロドリゲス島やプラト島の自然に囲まれた社会での生活に適応しているだけでなく、身体的にも土地と強く結びついていることがわかる。よってロドリゲス島やプラト島はウーマあるいはシュルヤヴァティそのものなのだ。そしてアレクシとレオンはウーマやシュルヤヴァティに彼女たちの生活空間へと誘われ、生活の仕方について教わるが、これによりアレクシやレオンも、ロドリゲス島やプラト島の自然環境へと徐々に適応していくのである。

さらにウーマやシュルヤヴァティの土地との結びつきは、島に住み着く鳥の描写からも理解することができる¹⁴⁾。どちらの作品においても、島に住み着く鳥たちは、外部からの侵入を決して許さず、島の番人として、人間を威嚇する。またレオンが「僕は、陸地の端っこにいる。そこは鳥たちの世界が始まる場所だ」(Q, 203)と語ることからも、鳥たちが、人間の社会ではなく、自然の世界に属しているということがわかる。

このように鳥は人間とは別の世界の人間として描かれるが、一方でウーマやシュルヤヴァティは、鳥と同じ世界の人間として描かれる。例えばアレクシは、ウーマが登場すると「同時に2羽の白い鳥が現れるのを見る」(CO, 323)。そしてウーマが姿を消した際には「海鳥たちはもういない」

(CO, 241) という。このようにウーマはまるで鳥たちの群れの中にいるもう1羽の鳥であるかのように、鳥たちと共に行動している。またウーマの眼差しは「鳥の〔眼差し〕のようである」(CO, 202) と語ることからも、鳥とウーマが相似たる類のものであることがわかる。さらに『隔離』のシュルヤヴァティは「すでに暗くなった水の上にいる彼女のシルエットは、まるでぎこちない鳥のようであった」(Q, 203) と、身体を鳥に例えて表現され、レオンと結ばれた夜には「僕たちはたぶん、〔鳥たちの〕秩序の中に入ったのだ」(Q, 376) と記される。要するにレオンは、鳥の世界に属するシュルヤヴァティと結ばれたことにより、今まで自分が属していた人間の世界から、自然の世界へと移り住むことができるようになったのだ。

II-2 土地と精神

これまでロドリゲス島もプラト島も、自然に支配された土地であるとし、土地と身体の結びつきについて述べてきた。ここではまずレオンの物語において、プラト島の大地が死者と関連した特別な意味を持つこと。そしてレオンがその大地へ如何に適応していったのかということについて検討する。

プラト島には火葬場や共同墓地があり、シュルヤヴァティは死者と土地の関係性について以下のように考えている。「(…) 死者はどこにも行かないの。彼らは私たちと共に生活をしていて、火葬されたところが、彼らの家だそうよ」(Q, 155)。このようにプラト島には死者が、普通の人間と同じように住み着いており、シュルヤヴァティは現実世界で他者と共に生きているのと同じような感覚で、死者とともに生きているのだ。そしてレオンに以下のように諭す。

死者が怖い？怖がってはいけないわ。彼らは私たちと一緒にいて、

離れてはいかないのよ。母が言うには、夜に彼女が眠れない時に、死者が見えるらしいわ。彼らは砂浜の上を歩いて、住む場所を探しているそうよ。鳥の中や、植物の中、海底の魚の中にでさえ、死者はいるのよ (Q, 163)。

この引用からフランスで生きてきたレオンにとって、死者と共に暮らしていて、あちこちに存在するというのは、非常識的な価値観で、恐れを伴う事象であったことがわかる。シュルヤヴァティはレオンに死者の土地へと適応させるために、次のような行動をする。

シュルヤヴァティは黒い砂に混ざった灰を少しつまみ、その指をゆっくりとぼくの顔や頬、まぶたに撫でつける。彼女が線や絵を描くと、大きな穏やかさがぼくの中に入ってくるのを感じる。彼女は自分の言葉で、まるで祈りか歌のような言葉を話す (Q, 163)。

これはシュルヤヴァティが、レオンを自分の世界へと導き入れるための儀式であると考えられる。レオンがその顔についた灰を好み、洗い流そうとはしない様子から、レオンはこの儀式を受け入れていることがわかる。そしてこの灰をつける儀式によって、レオンの属する人間の社会からシュルヤヴァティの属する自然の世界へと所属を移すこととなる。その証拠としてこの儀式の日を境に、アレクシは「ぼくはシュルヤの世界に属する人間だ」(Q, 182) と断言するようになるのだ。

またレオンのガブリエル島に対する印象の変化にも注目すべきだろう。この島はプラト島から泳げる距離にある島であり、感染病が重症化した患者たちを隔離し、火葬する場所でもある。レオンは初めてガブリエル島に到着し、探索していた時には「焦燥や不安を自分の内に感じる」(Q, 138)

と語るが、再び訪れた時には「安堵のようなものを感じる」（Q, 289）。このように死者の火葬場であるガブリエル島に対して、レオンが次第に安心を感じるようになったという変化は、シュルヤヴァティから死者との付き合い方について習い、適応していったことの証明となるだろう。

『隔離』にはこのような死者との交感が象徴的に描かれるが、一方で『黄金探索者』には、死者との交わりについての描写が一切見られない。これは『隔離』が長い歴史の中に位置する現在の物語であるのに対し、『黄金探索者』は歴史性を持たない現在の物語であるからである。実際『隔離』は、19世紀末のレオンの物語の中に、19世紀中頃のシュルヤヴァティの母親の物語が組み込まれる入れ子構造となっており、物語は大きな歴史の中で進行しているように描かれるが、『黄金探索者』はアレクシと共に物語が経過するだけである。以上より2作品の死者をめぐる差異が明らかである。

4. 主人公と選択

第3章の考察では、主人公と関係の深い女性登場人物について述べた。その結果、現実の世界を生きる姉と、自然の世界を生きる恋人は、対照的な役割を果たすことが分かった。この事実を踏まえて、本章では両作品の主人公と姉や恋人との関係性において、主人公がどのような選択肢を選び、どのような結末を迎えたのかについて検討する。

I アレクシと姉と恋人

A ロール

前述したように、アレクシとロールは恋人のように仲が良かった過去がある。しかしロールが初潮を迎えた時を境に、徐々に溝が深まり始める。

ぼくはその日のロールのことを覚えている。長い黒髪を携えた青白い女の子は、強情な様子で。世界と張り合うために、美しい顔で真っ直ぐ正面を向いていた。何かがすでに変わってしまっていて、彼女は遠く、無縁の存在であるかのようにだった。ロールはライトブルー色の綿のロングワンピースを着てベランダに立ち、袖を捲り上げて痩せ細った腕を見せ、ぼくが去り行く時に微笑んでいた。[その様子は] まるで「私は野蛮人の姉よ」とでも言っているかのようであった (CO, 71)。

この引用文の前までは、ロールの身体的な特徴についての具体的な描写は一切ない。なぜならアレキシとロールが恋人のように仲が良かった子ども頃は、2人が非常に近い人間であったからである。しかしロールは初潮を迎えたことにより、非現実世界を生きる粗野なアレキシとは別の世界の人間へと変化する。つまり母親と共にモーリシャス島に残り貧困生活を送るロールと、夢のためにロドリゲス島へと向かうアレキシという、現実と夢の対立が生まれるのである。

その後ロドリゲス島へ向かったアレキシは、戦争に参加するために、財宝探索を中止する。そして戦後、一度ロールたちのもとへと戻るが、やはりロールたちの生活の現実と向き合うことができず、再びロドリゲス島へと向かおうとする。アレキシが旅立とうとしていることに気づいたロールは、「私たちはもう前のようににはならないのよ。もうここには私たちの居場所なんて絶対ないのよ！」(CO, 282) とアレキシを諭す。そしてアレキシも「彼女は正しいと知っている」(CO, 282) と言うが、それでもアレキシはロールに夢を語り続けるのだ。それはなぜなら第3章で述べたように、ウーマに導かれ、自然の世界に属する人間になってしまったからであり、現実の世界とは交わらない人間へと変貌してしまったからである。ロール

がウーマのことを、「呪いの女」（CO, 320）と揶揄する場面からも、ロールが違う世界に属するウーマを拒絶していることがわかる。こうしてロールとアレキシの対立は、修復がほぼ不可能なほど、深まってしまう。

また母親が亡くなると、ロールは修道院へと入ることを決める。アレキシはロールと一緒に住むことを提案するが、「突如離れて暮らしていた長い年月の間に、ロールを完全に失ってしまった」（CO, 320）ことに気づく。そしてロールと共に生きることが完全に不可能であると察するが、それでもアレキシは夢をやめることができない。以下はロールが修道院へと入る直前に、アレキシと会話していた最後の場面の引用である。

そう、あと少しの間、ロールの眼は楽しそうに輝いている。僕たちはまだ近くにいる。かつて僕たちが一緒にいるのを見た人々が言っていたように「恋人」でいられる（CO, 321）。

このようにアレキシは最後まで、ロールとブーカンの谷での幸福の日々を送り、その夢を共有することを望んでいる。そしてこのように夢を諦めきれないアレキシを残して、現実と向き合うロールは、修道院へと入ってしまうのだ。

B ウーマ

第3章で述べたように、ウーマはアレキシがロドリゲス島で出会った恋人である。2人は恋人として、ロドリゲス島の自然の中で暮らしていたが、アレキシはブーカンの谷での暮らしを夢見ていたため、ある時ウーマにモーリシャス島の自然の世界で暮らすことを提案する。しかしウーマはこの提案を拒否し、「この私がどこへ行けるというの？」（CO, 229）と語る。これは山の民であるウーマによる、どこかへ定住するということなど許さ

れていないという意識の表れである。またウーマは前述したように、アレクシの自然の世界への導き手となるが、アレクシがその世界に長居しようとする、「あなたは行かないと。ここに居てはいけないわ」(CO, 229)とアレクシを拒否する。要するにウーマは、ある世界に属する人間が、他の世界へと完全に属することはできないと考えているのだ。これは「アレクシがロールの話をすると、ウーマは「仲良くなりたいわ」と言うが、すぐに「でもそんなことは不可能ね」と付け加える」(CO, 326)という描写からも明らかである。このようなウーマの現実的とも言える視点は、恋人関係であるアレクシとウーマが埋めることのできない溝を形成するのである。

またウーマには家族を一番に尊重するという特徴がある。ウーマの父親は、彼女の幼少期に亡くなり、母親は物語の中盤で亡くなり、唯一残された家族はウーマの弟スリである。ウーマは弟について「私は弟が好きだった。スリは穏やかで純粋無垢だったの。母が神の使者と言うのもわかるわ…」(CO, 207)と語り、非常に可愛がっていることがわかる。また如何に家族を大切にしているのかということは、アレクシと戦後によりよく再会できた際にも「あなたはロールと一緒に戻らなければいけないわ」(CO, 326)と伝えることからわかるだろう。山の民で特定の居住地を持たないウーマにとって、家族とは自分にとっての唯一の所属である。そして前述したように、自分と他の世界に生きるアレクシとは、同じ世界に属する人間になれないと、要するに家族にはなれないと考えている。そのため最終的に、ウーマはアレクシの元を去り、弟のもとへと戻るのである。夢想家のアレクシには、立ち去るウーマを引き止める力はなく、ただその結末を受け止めるだけであった。

II レオンと姉と恋人

A シュザンヌ

レオンとシュザンヌは家族として共にモーリシャス島へと向かうが、第2章でも述べたように、レオンが現実気づいてアンナの土地の夢を失い、代わりにシュルヤヴァティとの夢を見るようになると、少しずつ距離が遠くなってゆく。これはレオンとジャックが対立する、以下の描写からもわかる。「ぼくたちはもう何も共有していないのだ。もう決して前にはなれないだろう。あなたとシュザンヌが行く方と、ぼくは反対の方に行くだろう」(Q, 354)。シュザンヌはジャックの世界に属する人間である。そのためシュルヤヴァティの世界に属し、ジャックと対立するレオンとは、必然的に同じ道を歩むことはできないのだ。

また現実を見据えるシュザンヌは、シュルヤヴァティと仲を深めて、徐々に変化していくレオンの姿を見逃さない。そしてシュルヤヴァティのもとから帰ってきたレオンに対して「非難を含んだ眼差し」(Q, 182)を向けたり、シュルヤヴァティを「あなたの舞姫」(Q, 250)と揶揄したりすることからもわかるように、レオンの変化を認めようとしない。このようにシュザンヌはレオンとシュルヤヴァティの仲を認めないが、レオンと仲違いをしているわけではない。それはレオンが「シュザンヌの顔、その額、ブルーグレーの眼のせいで、ぼくは隔離所に囚われているのだ」(Q, 262)と感じていることからわかるように、レオンがシュザンヌの世界から完全に抜け出すことができないからである。要するにレオンは、対極的な存在であるシュザンヌとシュルヤヴァティとの間で板挟み状態となる。

しかしこの状態も長く続くわけではない。シュルヤヴァティが、マリア熱に浮かされガブリエル島へと移動させられたシュザンヌを看病したことが契機となり、シュザンヌのシュルヤヴァティに対する見方が変化する。シュザンヌが「シュルヤヴァティは天使よ」(Q, 264)と語るのは、シュ

ルヤヴァティを肯定的に捉えている証拠である。こうしてシュザンヌがシュルヤヴァティを認めたことにより、レオンはシュルヤヴァティと生きる道を選択できるようになる。

またレオンはシュザンヌとの別れを目前にすると、以下のように語る。

ぼくがここにいるのはシュザンヌのためである。彼女のために、ぼくは留まっている。彼女が唯一のぼくの家族だ。(…) ぼくは彼女が好きだ。彼女を忘れることなどできないだろう。ぼくを怒らせるのはこれだ。ぼくの目を涙で潤ませるのはそれが理由なのだ (Q, 359)。

レオンは血縁の家族の現実を知り、失望し、夢から覚めた。そのため唯一の血縁ではないシュザンヌだけを家族として考え、別れを悲しむのだ。以上よりシュザンヌという存在が、レオンにとって、シュルヤヴァティとの未来の選択の足枷となるほど、重要な存在であったということがわかるだろう。

B シュルヤヴァティ

レオンはシュルヤヴァティと出会ってから、シュルヤヴァティが属する自然の世界と、シュザンヌとジャックの属する人間の社会を行き来する生活を送る。前述したように、レオンにとって異なる世界を行き来することで、二律背反に陥るが、最終的にレオンはシュルヤヴァティの世界を選ぶ。なぜならレオンが自分とモーリシャス島との関係を完全に断ち切り、家族の夢を捨てることによって、シュルヤヴァティとの夢を見るという選択をすることが可能になったからである。これは以下の、レオンとシュルヤヴァティが2人で旅立つ場面における、象徴的な行動からも読み取れるだろう。

シュルヤはぼくの首に、登録番号が書かれているプレートを、お守りのように下げてくれた。これは〔シュルヤの母である〕アナントが、ボワニブルを発つ時に、祖母からもらったものだ。こうして今、ぼくには名前と家族ができたのだ。モーリシャス島に入れるのだ（Q, 416）。

レオンはシュルヤヴァティと家族になることで、新たな自分の居場所を確立し、新しいレオンとなるのである。

またシュルヤヴァティがレオンと共に旅立つ覚悟ができたのは、母親の死が関係している。そもそもシュルヤヴァティがプラト島へとやってきたのは、シュルヤヴァティの祖母がこの地で亡くなっており、母親も同じ地で一生を終えたいと考えていたからである。これは第3章で述べた、死者は亡くなった土地に住まうという考えに依るものである。そのため彼女にとって母親の死を看取することは、一種の使命のようなものであった。だからこそシュルヤヴァティが母親の火葬を行っていた時、レオンは「まるで彼女自身も燃えているかのよう」（Q, 330）であったと語るのだ。そして彼女は全ての儀式を終えると、「終わったのよ。もう今までの私ではないわ」（Q, 332）と言い残し、眠りにつくのであった。

さらに母親の生前は、母親の故郷であるイギリスについての話を聞いたかったが、母親が亡くなると、イギリスに関連する言葉を一切発することがなくなる。このようなことから、母親の死と共に、過去のシュルヤヴァティも死に、新しいシュルヤヴァティへと生まれ変わったことがわかる。生まれ変わった彼女には、もはやプラト島に留まる必要がない。こうしてシュルヤヴァティもレオンと共に旅立つ決意ができたのだ。

5. おわりに：『黄金探索者』から『隔離』へ

本論ではここまで『黄金探索者』から『隔離』までの変化について、アレクシとレオンの物語の内容から検討してきた。その結果、物語内容の差異は2点あると考えられる。まず第一に姉と恋人の関係における差異である。両作品において、姉と恋人が対立する存在として描かれていることは共通している。例えば『黄金探索者』では現実を見据えるロールは、アレクシを夢の世界へと導いたウーマを揶揄する。そして『隔離』においても、シュザンヌが、レオンを導くシュルヤヴァティを軽蔑する。このように対立する恋人と姉に挟まれ、主人公たちは板挟み状態となる。一方で『黄金探索者』ではロールは最後までウーマを認めることはなく、2人は交わることがないが、『隔離』ではシュルヤヴァティが病気のシュザンヌの介抱をしたことが契機となり、シュザンヌはシュルヤヴァティを受け入れる。このように姉の恋人への対応の差異が、主人公たちの結末、要するに恋人と添い遂げるか否かという選択に影響を与えていることがわかるだろう。

第二に、両作品における主人公の夢にも差異がある。『黄金探索者』のアレクシと『隔離』のレオンは共に夢想家であり、アレクシはブーカンの谷の夢を、レオンはアンナの家を追求していた。けれども2人の主人公たちは、『黄金探索者』では家族という現実、『隔離』ではアンナに住まう長老たちの現実と直面することとなる。このように夢想家であるという点と、物語の過程で現実を知るという点において2作品は共通している。しかしながら、両主人公が現実気づいた後の対応には差異が見られる。というのもアレクシは最後まで夢を諦めることができないのに対し、レオンは一度アンナに対する夢を諦めた後、シュルヤヴァティの夢を見るといのように、夢を変化させるのである。

以上の変化は両作品のもうひとつの時間軸の物語と比較しても考えるこ

とができるだろう。まず女性登場人物に関しては、『ロドリゲス島への旅』では女性がほぼ登場しないのに対し、『隔離』の現代のレオンの物語では、アンナという象徴的な女性が登場する。そして夢については、『ロドリゲス島への旅』では、祖父の残された種類を読んだ語り手が、祖父の痕跡を辿るために、ロドリヘス島を探索する話であるが、この探索は祖先が生きた時代を生きてみたいという夢から始まる。また『隔離』における現代の語り手であるレオンの物語では、祖母の現実らしい語りから、祖先についての夢想をし、唯一の祖先の生き残りであるアンナの元へと訪問する。このように両作品の間で、女性登場人物や、祖先の捉え方及び祖先に対する夢想には差異が見られるのだ。

本論文では、『黄金探索者』のアレクシと『隔離』のレオンの物語を比較し、以上のような差異が見られることがわかった。また今回は物語内容に着目して分析したが、もうひとつの時間の物語軸や、他の視点から分析することで、両作品における新たな変化を見出すことができると考えられるだろう。さらに他のモーリシャス作品には同じような変化が見られるのか、そしてモーリシャス作品以外の同時期に発表された作品においても同じような研究結果を得られるのかなど、次々と疑問が湧いてくるが、それについてはまた別の機会に論じることしよう。

引用文献

一次文献

LE CLÉZIO, Jean-Marie Gustave, *Le Chercheur d'or*, Gallimard, 1985.

——, *Printemps et autre saisons*, Gallimard, 1989.

——, *La Quarantaine*, Gallimard, 1995.

ジャン＝マリー・ギュスターヴ・ル・クレジオ、『黄金探索者』、世界文学全集Ⅱ
-09、中地義和訳、河出書房新社、2009年。

——、『春、その他の季節』、佐藤領時訳、集英社、1993 年。

——、『隔離の島』、中地義和訳、筑摩書房、2013 年。

ル・クレジオに関する書籍・論文

DARBEAU, Bertrand, « Le Clézio *Le Chercheur d'or* », *La recherche du bonheur*, GF Flammarion, 2005, pp. 147–199.

GARCIN, Jérôme, « Une enfance africaine. Le Clézio: “J’ai peur de ne plus avoir le temps...” », *L’Événement du Jeudi*, 1991, pp. 100–103.

SOBY, Christelle, *Le féminin chez J. M. G. Le Clézio*, Le Manuscrit, 2010.

鈴木雅生、『『砂漠』から『黄金の魚』へ：ル・クレジオの1990年代における「新たな出発」、『仏語仏文学研究』、55号、東京大学仏語仏文学研究会、2022年、pp. 323–338。

中地義和、『父祖の物語を書く作家』、『ル・クレジオ——地上の夢』、思潮社、2006年、pp. 156–167。

——、『記憶、夢想、フィクション——『黄金探索者』から『隔離の島』へ』、『隔離の島』、筑摩書房、2013年、pp. 462–485。

映像資料

「文学創造における記憶と想像力」、*UTokyo TV*、東京大学、2013。（最終閲覧日 2024 年 4 月 15 日 : https://tv.he.u-tokyo.ac.jp/lecture_4439/）（中地義和（聞き手）、「文学創造における記憶と想像力：ル・クレジオとの対話」、『文藝春秋』、4月号、文藝春秋、2014年、pp. 222–241。）

注

- 1) 本稿では、ル・クレジオの作品を引用する際には、以下の版を使用し、略号と数字で引用書と頁数を示す。CO: *Le Chercheur d'or*, Gallimard, 1985. P: *Printemps et autre saison*, Gallimard, 1989. Q: *La Quarantaine*, Gallimard, 1995.
また本論文と注で引用した仏語の文章は全て拙訳である。そして引用したテキストにおいて、単語を補足した部分は [] で囲んでいる。
- 2) ル・クレジオの家系とモーリシャス島には深い関係がある。それはル・クレジオの祖先であるフランソワ・アレクシ・ル・クレジオ (François Alexis Le Clézio) が18世紀にフランス島（現在のモーリシャス島）へと降り立ち、定住を始めたことを起源としている。その後フランソワ・アレクシ・ル・

クレジオの息子のウージェヌ（Eugène）は、1856年に家を購入し、その家をウーレカ（Euréka、「我発見せり」の意味）と名付ける。ウーレカは一家の富と幸福の象徴となるが、ウージェヌの息子の、ウージェヌ卿（Sir Eugène）と弟のヘンリー卿（Sir Henry）の確執により、最終的にこの家はヘンリー卿によって買い取られてしまう。またウージェヌ卿にはレオン（Léon）とアレクシ（Alexis）という2人の息子がおり、作家ル・クレジオはレオンの息子ラウル（Raoul）とアレクシの娘シモンヌ（Simone）との間に生まれた子どもでもある。すなわち作家ル・クレジオはウーレカを奪われたウージェヌ卿の直系の子孫なのだ。

（上記のル・クレジオの家族構成及びモーリシャス島をめぐる祖先の背景については、ベルトラン・ダルボーの以下論文における「1『黄金探索者』の紹介」の章を参照した。Bertrand Darbeau, « Le Clézio *Le Chercheur d'or* », *La recherche du bonheur*, GF Flammarion, 2005, pp. 151–156.）

- 3) 『黄金探索者』(*Le Chercheur d'or*, 1985)、『ロドリゲス島への旅』(*Voyage à Rodrigues*, 1986)、『隔離』(*La Quarantaine*, 1995)、『帰帰』(*Révolutions*, 2003)、『アルマ』(*Alma*, 2017)
- 4) ル・クレジオはインタビューにて「なぜなら50歳というのは、自分自身を見つめ直す年齢であるから」と発言している。(Jérôme Garcin, « Une enfance africaine. Le Clézio: “J’ai peur de ne plus avoir le temps...” », *L’Événement du Jeudi*, 1991, p. 101.
- 5) 鈴木雅生はル・クレジオの80年代から90年代の変化について、以下のように述べている。「それまでは同時代の問題について表立って発言することのなかったル・クレジオは、90年代に入ると、日本企業の塩田開発による環境破壊、仏領ポリネシアにおける核開発実験、フランス国内の移民排斥問題など、世界と社会の不正に対して積極的に声を上げるようになる。」(鈴木雅生、『『砂漠』から『黄金の魚』へ：ル・クレジオの1990年代における「新たな出発」』、『仏語仏文学研究』、55号、東京大学仏語仏文学研究会、2022年、pp. 336–337.)
- 6) 以下、中地義和の指摘である。「主人公はともに、強いノスタルジーに突き動かされる二十歳前後の若者であり、孤島（ロドリゲス島/プラト島）で、別の新たな世界へといざなう野生の娘（ウーマ/シュルヤヴァティ）と遭遇する。また彼らには、実業家としては失格の夢想家肌の父親と、その兄で、広大なサトウキビ農場経営者にして製糖時工場主の、強欲で冷徹な伯父（リュドヴィク/アレクサンドル）がおり、伯父は首都ポート・ルイス

のランパール街に事務所を抱えている。アレクシにはロールという姉がおり、レオンにはシュザンヌという義姉がいて、共に深い情愛で結ばれているが、姉たちは旧来の価値観のなかで夢を紡いでおり、その枠組みそのものを超えるか否かという問題を抱える主人公は、彼女たちとは別の道を歩まざるを得ない……といった、人物配置と状況設定の類似である。」(中地義和、「記憶、夢想、フィクション——『黄金探索者』から『隔離の島』へ」、『隔離の島』、筑摩書房、2013年、pp. 464-465。)

- 7) 『黄金探索者』の主人公であるアレクシは、ル・クレジオの実の祖父であるレオンをモデルとし、『隔離』の主人公であるレオンは実の祖父のアレクシをモデルにしている。またル・クレジオの祖先の家であるウーレカは、『黄金探索者』ではブーカンに築いた「立派な庭のある白くて美しい家」(CO, 142)として、『隔離』では「アンナの家」(Q, 21)として描かれ、どちらも過去の幸福の象徴として存在を示している。(上記のル・クレジオの祖先と作品の関係性については中地義和の「記憶、夢想、フィクション——『黄金探索者』から『隔離の島』へ」(前掲書)を参照した。)
- 8) この件に関しては、「当初『黄金探索者の日記』の題の元に二部構成の一卷本として刊行される予定であった。しかし何らかの事情で、結局は独立した二冊として出版された」と中地義和が述べている。(中地義和、「父祖の物語を書く作家」、『ル・クレジオ地上の夢』、思潮社、p. 161。)またル・クレジオも2013年に東京大学で行った講演会にて次のように語っている。「まず白状したいのは、私は2つの本を同時に書きたかったのです。『黄金探索者』と『ロドリゲス島への旅』の2冊は、同時に出版されるべきだったのです。それからそれがあまりにも論証的過ぎるのではないかと思います、まだ一緒に発表されていなかったこれらの本を切り離すことを選びました。けれどもそれらは1つの本であるべきだったのです。」(「文学創造における記憶と想像力」、UTokyo TV、東京大学、2013。最終閲覧日 2024年4月15日 : https://tv.he.u-tokyo.ac.jp/lecture_4439/)
- 9) 『隔離』にはアンナという女性と、アンナという地名が存在するが、ここでは地名のアンナの意味である。
- 10) レオンが子ども時代に過ごしていた寄宿舍。
- 11) レオンの両親。
- 12) 脱走奴隷のこと。特定の居住地を持たず、人里離れた山奥で、人を避けて移動しながら暮らしている。
- 13) クリステル・ソビーも同様に、ウーマとシュルヤヴァティが主人公の指導

者としての役割を果たすと指摘している。「自然に近い女性登場人物は、他の若い登場人物たちと対立するだけではない。一部の女性は自然への適合によって、男性登場人物と区別されるのだ。（…）アレキシとレオンの恋人であるウーマとシュルヤは、彼らに自然の秘密を教え、2人の男性の同伴者及び先導者となるのである。」（Christelle Soby, *Le féminin chez J. M. G. Le Clézio*, Le Manuscrit, 2010, p. 40.）

- 14) 鳥と女性の関係は、1989年に発表された『春、その他の季節』（*Printemps et autres saisons*）の短編「雨季」（« La saison des pluies »）からも見ることができる。まずモーリシャス島出身の異国の少女であるギャビーは「熱帯植物と鳥の優雅さと強さ」（P, 175）を兼ね備えた女性であると描写される。さらに物語の後半にてギャビーが気力を失っていくような場面では、「ムクドリたちは、風の中で葉が舞うように、逃げていった」（P, 195）と描かれる。この2つの引用から、鳥の描写はギャビーの感情と呼応しており、よって女性登場人物と鳥との関連性を否定することができないとわかるだろう。

Du *Chercheur d'or* à *La Quarantaine*: entre les sœurs et les amoureuses

KAWABE, Saki

Jean-Marie Gustave Le Clézio (1940–) a publié plusieurs œuvres sur l'île Maurice à partir de 1985. Pourquoi a-t-il écrit sur cette île? Au XVIII^e siècle, François Alexis Le Clézio, ancêtre de l'écrivain, a débarqué pour la première fois sur l'île de France (l'ancien nom de l'île Maurice), où sa famille a décidé de s'établir. En 1856, Sir Eugène, l'arrière-grand-père de l'écrivain, y a acheté une maison et l'a nommée Euréka. Celle-ci est ainsi devenue le symbole de la prospérité et de la chute familiale. Comme ses ancêtres en ligne directe en ont été expulsés à la suite d'une brouille dans la famille, Le Clézio s'intéresse beaucoup à cette maison et à son histoire qu'il raconte dans ses œuvres dont plusieurs personnages sont basés sur ses ancêtres. Nous nous focalisons donc sur les premiers textes de Le Clézio concernant l'île Maurice; *Le Chercheur d'or* (1985) et *La Quarantaine* (1995), et nous aborderons le changement survenu dans son œuvre de 1985 à 1995; ces années sont très importantes pour Le Clézio, puisqu'il a eu 50 ans en 1990, date à laquelle, comme Suzuki Masao l'a déjà montré, il a commencé à s'intéresser à la politique.

De plus, pour analyser le texte, il faut analyser les œuvres à travers les deux axes temporels qui les caractérisent. Dans *La Quarantaine*, par exemple, l'œuvre est composée de l'histoire de Léon (« L'empoisonneur » et « La Quarantaine ») et de l'histoire de son descendant, Léon (« Le Voyage sans fin » et « Anna »). Encore à propos du *Chercheur d'or* et de *Voyage à Rodrigues* (1986), que Le Clézio pensait d'abord publier ensemble, nous considérons ainsi les deux textes comme appartenant au même ouvrage. Étant donné que ce dernier roman est l'histoire du descendant d'Alexis (le héros de *Le Chercheur d'or*), il s'adapte à l'histoire du descendant Léon, de même que le premier roman s'adapte à l'histoire de Léon. Et nous étudierons plus particulièrement l'histoire des ancêtres, Alexis et Léon.

Dans un premier temps, nous essayerons la différence entre le rêve et la réalité

pour Alexis et pour Léon. Dans un deuxième, nous classifions les personnages féminins selon leurs relations avec les héros; les sœurs (Laure et Suzanne) et les amoureuses (Ouma et Syruvavati), et nous examinerons leurs rôles dans ces œuvres. Puis, dans un troisième temps, nous analyserons les choix de la vie de héros par rapport aux personnages féminins. Enfin, dans un dernier temps, nous nous estimons la différence entre les deux histoires; en somme, nous pouvons donc dire qu'il y a deux types de différence dans ces œuvres; c'est-à-dire que le rapport entre des héros et les personnages féminins et le rêve des héros sont tout à fait différents.

（フランス文学専攻 博士後期課程 1 年）